

LEVEL

3

Web  
Tadoku  
Books

# 徒然草

つれ

づれ

ぐさ

三話

さんわ



げんさく けんこう  
原作＝兼好



朗読音声のダウンロード  
Audio download

## よ まえ ★読む前に Before you read

### 《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



### 《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



『徒然草』と作者について

『徒然草』は、鎌倉時代（一一八五—一三三三）の終わり頃、兼好が書きました。

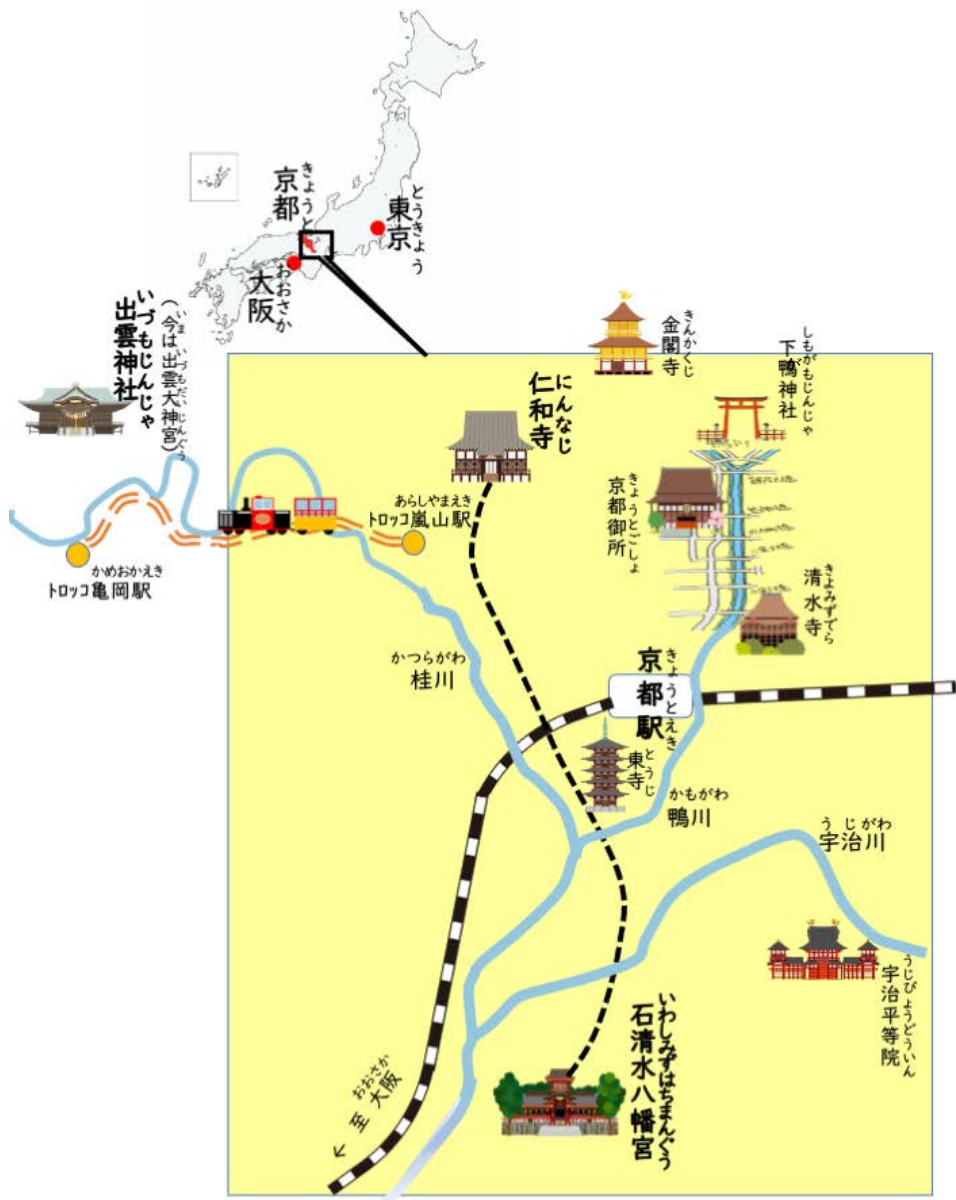
「つれづれなるままに（暇ですることもないので）」という文で始まって、兼好が思ったことや考えたこと、人から聞いたことや見たことなどを書いたものです。このような読みものを「随筆」と言います。

『徒然草』には、仏教のことや、不思議な話、人の生き方など、二百四十三の話があります。七百年前のものですが、人々の暮らしや気持ち、今の私たちにも、よくわかります。

兼好は、若い時は天皇の下で働いていましたが、三十歳ぐらいの頃、お坊さんになり、京都の仁和寺の近くに住んでいたと言われています。

この本では、京都のお坊さんが出てくる面白い話を三話、紹介します。

にんなじ いわしみずはちまんぐう いづもじんじゃ ちず  
**仁和寺、石清水八幡宮、出雲神社の地図**



一、 どうして聞かなかったの？（第五十二話）

京都の仁和寺に年をとったお坊さんがいました。

—— 私（わたし）も年をとった。死ぬ（しぬ）前に、有名な石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう）に行（い）ってみたい ——

とおもって思（おも）っていました。

でも、石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう）は仁和寺（にんなじ）から遠（とお）いです。歩（ある）いて行（い）けるでしょうか。

お坊（ぼう）さんは心配（しんぱい）でした。



——でも行きたい、行きたい!! やっぱり行きたい!! ——

お坊さんは、ある日、遠い石清水八幡宮に一人で出かけました。

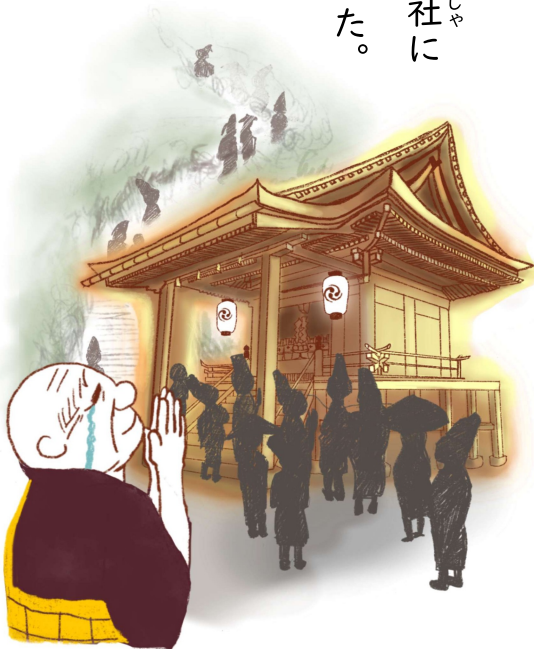
歩いて、歩いて、歩いて、やっと着きました。

「ここが石清水八幡宮か。おお、おお、すごい! わあ、立派だ!

それに何とたくさんの人だろう!」

お坊さんは、山の下にあるお寺と神社に

お参りしました。お坊さんは幸せでした。



お坊<sup>ぼう</sup>さんは、また<sup>ある</sup>歩いて<sup>にんなじ</sup>仁和寺に<sup>かえ</sup>帰って<sup>かえ</sup>きました。

友<sup>とも</sup>だちのお坊<sup>ぼう</sup>さんに<sup>いわし</sup>石清水八幡宮へ<sup>い</sup>行った<sup>い</sup>ことを<sup>はな</sup>話<sup>はな</sup>しました。

「行<sup>い</sup>って<sup>い</sup>きたよ。夢<sup>ゆめ</sup>が<sup>ゆめ</sup>かなって<sup>ゆめ</sup>うれしかった」

「それはよかった。ずっと<sup>い</sup>行<sup>い</sup>きたいと<sup>い</sup>言<sup>い</sup>っていた<sup>い</sup>からね。それで、<sup>いわし</sup>石清水八幡宮は<sup>い</sup>どんな<sup>い</sup>だった？」

「それは<sup>ことば</sup>言葉<sup>い</sup>では<sup>い</sup>言<sup>い</sup>えない<sup>い</sup>くらい<sup>い</sup>立<sup>りっ</sup>派<sup>ぱ</sup>だった。素<sup>す</sup>晴<sup>ば</sup>らしか<sup>い</sup>ったよ！ お<sup>まい</sup>参<sup>まい</sup>りの<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>も<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>い<sup>い</sup>て、と<sup>い</sup>ても<sup>い</sup>賑<sup>にぎ</sup>やか<sup>い</sup>だった」

「うん、うん。それで？」

「でも、一<sup>ひと</sup>つ<sup>ひと</sup>だけ<sup>ひと</sup>わ<sup>ひと</sup>から<sup>ひと</sup>ない<sup>ひと</sup>こ<sup>ひと</sup>が<sup>ひと</sup>ある<sup>ひと</sup>んだ。お<sup>まい</sup>参<sup>まい</sup>りの<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>たち<sup>ひと</sup>が、<sup>い</sup>み<sup>い</sup>んな、<sup>い</sup>ぞ<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>ぞ<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>山<sup>やま</sup>に<sup>のぼ</sup>登<sup>のぼ</sup>って<sup>のぼ</sup>い<sup>のぼ</sup>く<sup>のぼ</sup>んだ。ど<sup>い</sup>う<sup>い</sup>して、<sup>い</sup>み<sup>い</sup>んな、<sup>い</sup>山<sup>やま</sup>に<sup>のぼ</sup>登<sup>のぼ</sup>って<sup>のぼ</sup>い<sup>のぼ</sup>った<sup>のぼ</sup>の<sup>い</sup>かな？」

いわしみず  
石清水  
はちまんぐう  
八幡宮



「ええっ！ 登<sup>のぼ</sup>らなかつたのか？ 知<sup>し</sup>らなかつたのか？ 行<sup>い</sup>く前<sup>まえ</sup>にだれにも話<sup>はなし</sup>を聞<sup>き</sup>  
かなかつたのか？ 石清水八幡宮<sup>いわしみずはちまんぐう</sup>は山<sup>やま</sup>の上<sup>うえ</sup>にあるんだよ！」  
「えっ、えっ、山<sup>やま</sup>の上<sup>うえ</sup>？ あんなにお参<sup>まい</sup>りしたいと思<sup>おも</sup>っていたのに」



二、「猫又」って？（第八十九話）

きょうと  
京都のある家で、男の人たちが連歌の遊びをしていました。一人が短い歌を作ると、他の人がその歌に続けてまた短い歌を作ります。歌はどんどん長くなります。

よるおそ  
夜遅くまで遊びました。

「ああ、楽しかったね。夜も遅くなった。

そろそろ帰ろうか？」

「そうだね。またやりましょう」

「今夜は月がなくて、真っ暗だね。

き  
気をつけて帰ろう」

「そうだね。こんな夜だね。猫又が出てくるのは」



おとこ ひと 男の人たちの中に、お坊さんぼうさんがいました。お坊さんぼうさんは、聞きききました。

ねこまた なに 猫又ねこまたって何？ 猫？

「それが…動くのが速はやすぎて誰だれも見みたことがないんだ。人ひとを食たべるんだって」

「ええっ！」

「ははは、大丈夫だいじょうぶ。猫又ねこまたは山やまの中なかにいるから町まちには出でてこないよ」

「いや、町まちにもいるらしいよ。年としをとった猫ねこが、猫又ねこまたになって人ひとを食たべるんだよ」

お坊さんぼうさんは、怖こわくなって聞きききました。

「本当ほんとう？ 坊さんぼうさんも食たべるかなあ」

「食たべるぞ。食たべるぞ。」

お坊さんぼうさんも食たべるぞ。わっはっは」



お坊さんのお寺は京都の中でもさびしいところがありました。  
道は真つ暗で、その横を川が流れています。

お坊さんはその夜の連歌遊びで、とても上手に歌を作ったので、  
たくさんのお土産をもらいました。そして、  
歩きながら、猫又のことを考えました。

ときどき、風の吹く音や草の揺れる音がします。

そのたびに、お坊さんは、猫又かと思っ  
びくびくしました。

—— 怖いなあ。どうしよう、

猫又が出てきたら ——



その時<sup>とき</sup>です。

何<sup>なに</sup>かが動<sup>うご</sup>いて足<sup>あし</sup>にさわりました。

「出<sup>で</sup>た！ 猫<sup>ねこ</sup>又<sup>また</sup>だ！ わあ〜」

何<sup>なに</sup>かがお坊<sup>ぼう</sup>さんの首<sup>くび</sup>に飛<sup>と</sup>びつきました。

「わあ〜、わあ〜！」

お坊<sup>ぼう</sup>さんは、川<sup>かわ</sup>に落<sup>お</sup>ちました。



「わあ、助けて！ 猫又だ！ 猫又に食べられる〜！」

その声を聞いた村人たちが明かりを持って  
家から出てきました。

「何だ？ 何だ？」

「あれ、お寺のお坊さんだ」

村の人々は川からお坊さんを  
助け上げました。

お土産は、流れていってしまいました。



お坊<sup>ぼう</sup>さんは、

「ああ、死ぬ<sup>し</sup>ところだった！怖<sup>こわ</sup>かった！」

と言<sup>い</sup>って、泣<sup>な</sup>きながら家<sup>いえ</sup>へ帰<sup>かえ</sup>っていきました。

猫<sup>ねこまた</sup>又はどこへ行<sup>い</sup>ったんでしょうか？

いいえ、それは猫<sup>ねこまた</sup>又<sup>また</sup>ではありませんでした。

お坊<sup>ぼう</sup>さんのお寺<sup>てら</sup>の犬<sup>いぬ</sup>が、

「ご主人<sup>しゅじんさま</sup>様が帰<sup>かえ</sup>ってきた！」

と喜<sup>よろこ</sup>んで、お坊<sup>ぼう</sup>さんに飛<sup>と</sup>びついただけなのでした。



三・聖海上人の涙（第二百三十六話）

京都に、聖海上人という、とても立派なお坊さんが  
いました。

ある日、若いお坊さんたちに、

「丹波の出雲神社にお参りに行くが、一緒に来るか？」  
と言いました。

「行きたいです！」

「行きたいです！」

みんなであって、出雲神社に着きました。  
お参りをしました。



若いお坊さんたちは言いました。

「とても立派でびっくりしました」

「本当に来てよかったです」

神社の前に狛犬の像がありました。

聖海上人が言いました。

「みんな、この狛犬を見なさい。この置き方は

普通ではない。反対向きだ。みんな、これを見て

何も思わないか？ これには、何か深いわけがある

のだろう」

上人は涙を浮かべています。

みんなも、

「本当にこんな狛犬は見たことはありません。」





きょうと  
京都に帰って友だちに話しましょう」

と言いました。絵を描く人もいました。

そこに神社の人が歩いてきました。上人は、

「この狛犬はどうして反対向きなのでしょう。きっと何か深いわけがあるのでし  
ようね。そのわけを教えてください」

と言いました。神社の人は、

「ああ、また、子どもたちがやったな。

いつも、村の子どもたちが反対向きに

してしまうので、困っているんですよ」

と答えると、狛犬を普通の向きに

変えました。





つれづれぐさ さんわ  
徒然草 三話

発行年月日:2023年3月10日

けんこう  
原作:兼好

簡約・監修:NPO多言語多読

挿絵:池田あきつ





この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>